

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.23 2019*

キャリア支援課との協働による日本語授業
－2018年度「キャリア日本語」の実践より－

宮 崎 聡 子

Collaboration with the Career Support Center :
A Case Report of the “Career Japanese” Seminar in 2018

MIYAZAKI Satoko

長崎外大論叢

第23号
(別冊)

長崎外国語大学
2019年12月

キャリア支援課との協働による日本語授業 —2018年度「キャリア日本語」の実践より—

宮崎 聡子

Collaboration with the Career Support Center :
A Case Report of the “Career Japanese” Seminar in 2018

MIYAZAKI Satoko

Abstract / Short Outline (概要)

This paper reports the teaching methods utilized when training international students in Japan-specific career development and job hunting practices. The “Career Japanese” class has been held with the cooperation of the Career Support Center since 2015. The main objective of the special classes are for international students to learn the system and cultural background of job hunting in Japan, business Japanese, Japanese business etiquette, and other various skills and tips. In 2018, there were four types of focus classes; (1) the practice of writing resumes, (2) job interview practice, (3) the practice of telephone correspondence, (4) job group interview practice. These classes were designed mainly by career center staff. The Japanese instructor and career center staff collaborated in preparing classes and assess students’ needs throughout a semester. In a new approach, Japanese students taking the Japanese language teacher training course took part in classes as teaching assistants. International students’ reactions on the questionnaire indicated that they were satisfied, and the inclusion of Japanese teaching assistants increased students’ motivation.

キーワード

日本語教育、留学生へのキャリア支援、協働授業

1. はじめに

日本学生支援機構（2019）の報告によると、2017年5月1日現在の留学生数は26万7042人となり、10年前と比べ2倍以上増加しているという。しかし一方で、同年に留学生が日本企業等への就職を目的として在留資格変更許可申請を行った件数は、増加傾向にあるものの2万7962人とどまっておろ、その低さが顕著である。また同報告では、留学生が日本の就職活動で苦戦する要因として、「就職活動に対する理解不足」「ビジネスシーンでの日本語能力の不足」「求人情報の不足」が指摘されている。

そのような近年の実情を背景に、本学においても留学生のニーズに対応するとともに、きめ細かい指導ができるような取り組みが行われてきた。従来、「ビジネス日本語」としてあった科目が2015年度に「キャリア日本語」と名称変更され、さらに日本語教員（以下、「教員」とする）とキャリア支援課職員（以下、「支援課職員」とする）との協働による特別授業が開始された。画期的なその試みの成果は、春口（2015, 2016）に詳しく報告されており、教職員が連携して授業を提供することによって相

乗的な効果が得られることが明らかにされている。

本稿では、これまでの蓄積を受け継ぎつつ行われている支援課職員による「特別授業」について、2018年度の実践の詳細を報告し、今後の課題についても検討したい。

2. 「キャリア日本語」の概要と経緯

2. 1 概要

本学では学部留学生の選択科目として、前期（春学期）に「キャリア日本語Ⅰ」を、後期（秋学期）に「キャリア日本語Ⅱ」を開講している。これは、2014年度まで開講されていた「ビジネス日本語Ⅰ・Ⅱ」に代わり、2015年度から創設された科目である。当初、配当年次は2年生以上で、レベル別に2クラス開講されていたが、クラス数の削減や履修者数の変化により、2018年度から3年生以上となっている。履修人数は毎学期20～30名程度であり、学生の国籍は主に中国・韓国である。卒業後に備え、ビジネス場面において求められる実践的な日本語表現の獲得を目指すことを目的とし、また就職活動や大学院入試の事前準備ともなるような情報も提供している。

主教材は、DVD『映像で学ぶビジネス日本語』（日本映像教育社）と、それに対応した教科書である『ビジネス日本語①内定者編』・『ビジネス日本語②新入社員編』（凡人社）である。これらは、留学生が新社会人として必要になる基本的なビジネスマナーを学ぶための教材として編集されている。授業では、DVDを見ながら教員が作成したハンドアウトに要点を記入していく形をとり、必要に応じてスキットの会話練習などを行っている。またその他に、敬語の小テストを毎回課している。

2. 2 経緯

本科目におけるキャリア支援課との協働は、先に述べたように2015年度に当時の担当教員であった春口淳一氏によってデザインされたものである。春口（2015）では、この試みは、支援課職員を教室に招き、就職活動に関連しての見識を生かして授業目的に即した情報提供やクラス活動で腕を振るってもらおうというものであり、併せて留学生と支援課職員との接点になることにも副次的な効果として期待があったと述べられている。このような大学職員との協働授業は、「市民リテラシー型アーティキュレーション（Civic Literacy Articulation）」¹として機能するよう構築されたとしている（春口2016）。当時の支援課職員の協力を得て、学期中に3回、それぞれ「日本の企業紹介」「エントリーシートに挑戦」「模擬面接に挑戦」というテーマで、支援課職員が教壇に立つ特別授業が行われた。学習者へのアンケート調査と支援課職員へのインタビュー調査から、「今回の取り組みは両者にとって有用であったと考えられる。中でも教職員が相互補完をして教学支援に臨むとき、学習者の満足度を向上させる一手となることに注目したい」（p.147）と述べ、人的リソースとして支援課職員の知見を有効に活用することを提言している。

以上の流れを受け、筆者は2016年度から本科目を担当し、2017年度からは新たに配属された支援課職員の協力を得て特別授業の実施を継続している。前任教員によって構築されたキャリア支援課との関係性と理念を受け継ぎつつ、担当の支援課職員とともに試行錯誤をしながら新しい試みも取り入れている。

次節では、特別授業の実際を紹介する前に、本学留学生の卒業後の進路状況と履修生のニーズ調査の結果について述べる。

3. 学生の進路状況とニーズ調査

3. 1 卒業留学生の進路状況

2015年から2018年までの過去4年間の本学における卒業留学生の進路状況について、キャリア支援課からの資料をもとに示すと、表1のようになる。

表1 卒業留学生の進路状況

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
①日本での就職	8 (22%)	13 (30%)	21 (35%)	13 (26%)
②日本での大学院進学	7 (19%)	10 (23%)	12 (20%)	6 (12%)
③母国での就職	3 (8%)	3 (7%)	2 (3%)	3 (6%)
④帰国	19 (51%)	17 (40%)	25 (42%)	28 (56%)
合計	37 (100%)	43 (100%)	60 (100%)	50 (100%)

データによると過去4年においては、4～5割の留学生在卒業後に就職や進学で日本に残っていることがわかる。③は帰国前に母国での就職が決まっていた人数である。④の「帰国」については卒業時点での情報であるため、帰国後の詳細は明らかではない。2015年度～2017年度は、日本で就職した人の割合が微増していたが、2018年度はやや少ない結果となった。これは、もともと帰国を希望する学生が多かったことも影響していると考えられるが²、日本での就職を諦めた学生がいた可能性も否定できない。留学生の進路状況は毎学期ごとに変動が見られるため、継続した観察が必要となる。

3. 2 初回授業アンケートによるニーズ調査

初回授業のアンケート調査では、履修者に対して卒業後の進路希望や現在行っていることや、特別授業で聞きたいことなどを尋ねた。まず、進路希望については表2のような結果であった。

表2 進路希望（複数回答可）

	2018春学期 (22名)	2018秋学期 (32名)
① 日本での就職	8	7
② 日本での大学院進学	8	8
③ 帰国（母国での就職・進学）	8	15
④ まだわからない	0	2

履修者全体から見ると、日本での就職を希望する学生は春学期は22名中8名、秋学期は32名中7名であった。秋学期については、帰国を希望する学生の割合が高くなっており、学期による変動が見られる。帰国を希望する学生であっても、本科目を履修する学生は多い。その動機としては、「母国に帰り日本と関係する仕事に就きたいから」「社会人の言葉遣いや、ビジネスマナーはどこで就職しても役に立つと思うから」「敬語を勉強してアルバイトに役立てたい」などが挙げられていた。

次に、「就職・進学準備で現在行っていること」は以下のような回答であった。

- 【就活】 エントリーシート・履歴書を書く、インターンシップを探す・参加する、通訳の資格試験、企業研究、応募できる職業をネットで探す（母国）、自己分析、就職セミナーに参加、ポートフォリオの準備、SPI対策、TOEIC対策、漢字の勉強
- 【進学】 研究計画書の準備、専門についての勉強、指導教員の先生と相談、先輩に話を聞く、情報・資料集め

また、「特別授業で聞きたいこと」は以下のような回答であった。

- 【就活】 合同説明会の情報、面接の方法、履歴書の書き方、グループディスカッションの方法、留学生向けの就職準備方法、どんな職種があるか、秋卒業者のため秋募集の情報、昨年度の本学留学生の内定者数、長崎での外国人雇用の情報
- 【進学】 日本での進学の話、おすすめの大学院
- 【全般】 進学か就職かの選択方法、自分に合ったキャリアの分野の見つけ方、社会の動向

以上のアンケート結果を踏まえ、支援課職員からは「日本の就活の特徴と流れを知り、早めに動くことを促す」「頭だけの理解ではなく実践練習の機会を増やす」「情報集めの支援をし、キャリア支援課を身近に感じてもらう」ということに重点を置きたいという意見が出された。

4. 2018年度の特別授業について

4. 1 内容とスケジュール

いずれの学期においても、初回授業のアンケート調査結果をもとに、当該学期においてどのようなことを特別授業で取り上げるかを教員と支援課職員で話し合った。2018年度は、春学期に2回、秋学期に2回の計4回の特別授業を行った。便宜的にそれらを「特別授業①～④」とすると、概要は以下のようにまとめられる。

表3 2018年度 特別授業の内容

科目名（学期）	内容
キャリア日本語Ⅰ（春学期）	特別授業① 履歴書の書き方
	特別授業② 個人面接の実践練習
キャリア日本語Ⅱ（秋学期）	特別授業③ 電話対応の実践練習
	特別授業④ グループ面接の実践練習

春学期には、「履歴書の書き方」と履歴書の内容を口頭で伝えるための「面接での伝え方」を取り上げることにした。秋学期には、DVD教材の内容で学んだことを応用し、「電話対応」を取り上げ、また春学期に行えなかった「グループ面接」を取り上げることにした。いずれにおいても、社会人としてのマナーへの気づきを促すとともに、普段の大学生活におけるフォーマルさが求められる接触場面にもすぐに役立つものにする、就職希望者だけでなく大学院進学希望者にも配慮した内容であることを教員と支援課職員間で確認した。また、春学期は履修人数が多かったためにフィードバック

が不十分になったことを考慮し、秋学期には、就職活動を経験し、かつ日本語教員養成課程を履修している日本人学生3名にTAとして協力を仰ぐことにした。

全15回の授業スケジュールは、表4のようになる。特別授業の前後には準備や振り返りなど、関連する課題を配置した。例えば、履歴書の課題では、提出先をキャリアセンターに指定し、入室や挨拶、伝言のマナーを練習するとともに、全員が一度は足を運び支援課を直接見る機会になるよう課題を設定した。授業後の振り返りでは、復習をしたり、コメントを書いてもらったりした。また学期を通して教員と支援課職員間で頻繁に連絡を取り合い、合同説明会等の最新の就活情報を授業で学生に提供するなど、「キャリア日本語」がキャリア支援課と学生との橋渡しになるように心掛けた。

表4 2018年度「キャリア日本語Ⅰ・Ⅱ」授業スケジュール（実績）

回	キャリア日本語Ⅰ（春学期）	キャリア日本語Ⅱ（秋学期）
1	オリエンテーション、アンケート	オリエンテーション、アンケート
2	服装とエチケット、挨拶とお辞儀	電話対応の基本 電話の受け方
3	基本的なビジネスマナー	電話を取り次ぐ
4	敬語を使う理由・敬語の種類／ <u>履歴書課題配布</u>	伝言を受ける・問い合わせる
5	敬語を使う理由・敬語の種類	様々な電話の対応方法
6	ビジネス敬語の基本ルール <u>履歴書課題回収→支援課による添削</u>	相手が不在・電話中の時
7	尊敬語と謙譲語・丁寧でない言葉・過剰敬語	復習クイズ、 <u>電話対応練習問題（予習）</u>
8	特別授業①：履歴書の書き方・フィードバック	特別授業③：電話対応のマナー
9	<u>振り返り</u> 、復習クイズ	<u>振り返り</u> 、ビデオ視聴「NHK プロフェッショナル・仕事の流儀 就活応援スペシャル」
10	特別授業②：個人面接 実践練習	訪問先・受付でのマナー
11	<u>振り返り</u> 、ビジネス文書の種類・文書の文体	<u>面接について（「面接での質問例」を配布）</u>
12	ビジネス文書の基本形式	特別授業④：グループ面接 実践練習
13	封筒・はがきの書き方	<u>振り返り</u> 、支援課より就活情報提供
14	Eメールの書き方	接客・応接・案内のマナー
15	復習クイズ、今学期の振り返り	復習クイズ、今学期の振り返り

※下線は特別授業の関連事項。

4. 2 特別授業の流れと学生の反応

特別授業の内容は主に支援課職員がデザインを行い、当日も授業者として教壇に立った。教員は時間配分などの助言やグループ分け等の補佐を行った。以下、特別授業①～④の具体的な授業の流れと、授業後のコメントシートから得られた学生の反応について紹介する。

（1）特別授業① 「履歴書の書き方」（2018春学期）

〈授業の流れ〉

1) 事前課題として、履歴書の「クラブ活動・趣味・特技」欄を作成し、キャリア支援課に直接提出

に行くことを課した。提出の際には、入室のマナーを守り、挨拶、必要に応じてことづけなど伝言をするように教示した。

- 2) 特別授業にて、「日本の就活の流れ」と「履歴書の書き方」について講義を行った。その後支援課職員により添削されたものを返却した。個別にフィードバックをし、清書後、再提出をさせた。

〈学生のコメント〉

- ・企業はまず履歴書を通じて自分がどのような人間なのかを理解するということを知った。
- ・間違った表現や正しく方法などを親切にアドバイスしてもらい、自信を持って書くことができた。一人だとこのような練習ができず見送っていたが今回の機会を通じ就職の準備をしようと決心した。
- ・自己紹介は「ラブレターを書くように」と例えていたことや、良い例・悪い例を比較するように説明してもらえて、わかりやすく興味深かった。
- ・文化活動を書く時は単なる活動の内容の紹介ではなく、目的と学んだことを書くのが必要だと学んだ。
- ・韓国語では通じる言葉も日本にしたら通じないことがあることがわかり、もっと表現を勉強しようと思った。
- ・具体的な会社に出す履歴書ではなかったもので、何を書けばよいか難しかった。
- ・履歴書も勉強になったが、大学院の申請書の書き方についても教えてもらいたい。

(2) 特別授業② 「個人面接 実践練習」(2018春学期)

〈流れ〉

- 1) 「効果的な伝え方と印象の良い立居振舞」の講義を行い、「笑顔チェッカー」(笑顔を判定するアプリケーション)の紹介をした。
- 2) 特別授業①で完成させた「クラブ活動・趣味・特技」欄に書いた内容を、面接時に口頭で伝える練習を行った。練習は、学生を4人のグループに分け、それぞれ「面接官」「受験者」「カメラマン」「評価者」の役割を担い、ロールプレイング形式で行った。「評価者」は受験者の態度をチェックし、受験者のフィードバックシートへ記入し、「良かったところ」「改善・練習が必要なところ」を受験者へ伝え、シートを返却した。「カメラマン」は、受験者自身のスマートフォンで動画を撮影し、フィードバックの際には、受験者自身がその動画見て確認した。

〈学生のコメント〉

- ・実践練習は新鮮で面白かった。よく印象に残った。
- ・録画を見て、知らなかったクセを直すことができる。
- ・友達から自己紹介のフィードバックをもらい、足りないところがわかった。
- ・時間が少し短かった。
- ・グループは、知り合いの前だとやりづらいと感じた。
- ・実際の質問例をもっと知りたい。

(3) 特別授業③ 「電話対応のマナー」(2018秋学期)

〈流れ〉

- 1) 漫画教材(『マンガで体験! にっぽんのカイシャ』)³で、電話場面でよくある誤りをいくつか紹介し、自分の日常生活を振り返らせた。
- 2) 留学生活で起こり得る以下の4つの状況(表5)で、どのように話せばよいか電話対応を考えさせた。
- 3) 学生同士でペア練習をした後、学生一人ずつが教員・日本人TAと練習を行った。

表5 電話対応の状況

内容	状況
1. アルバイトのシフト変更	アルバイトの予定を入れていた日に就職の面接が決まった。店長に説明し、アルバイトのシフトを変更してもらう。
2. 大学院への募集要項請求	大学院の入試広報課に電話し、募集要項の郵送を頼む。
3. 宅配ドライバーに再配達電話	郵便局から不在票が届いた。ドライバーと直接話し、明日の午前中の再配達を頼む。
4. 大学からの着信に折り返す	大学のキャリア支援課から着信があったが、アルバイト中で電話に出られなかった。折り返し電話をかける。

〈学生のコメント〉

- ・シフト変更、再配達願、折り返し電話は生活に関係があって実用性がある。
- ・大学院の問い合わせが一番印象に残っている。
- ・日本人と実際に話し合っただけで役に立った。
- ・日本人学生が親切で、電話に出るのはそんなに怖くないと思えた。
- ・以前は電話が苦手で大嫌いだったがトレーニングを通して進歩したと思う。本当によかったことは、日本人の学生さんがそばにいて指導してくれたことだ。

(4) 特別授業④ 「グループ面接 実践練習」(2018秋学期)

〈流れ〉

- 1) 「印象の良い立居振舞」をテーマとして講義を行い、その中で面接の動画を視聴した。
- 2) グループ面接の設定で、面接室への入室、模擬面接、退室の流れを実践練習した。受講生を5, 6人に分け4つの班を作り、受験者班・カメラマン班・評価者班とし、ローテーションで交替した。カメラマンと評価者は、自分が担当する受験者1名の録画・観察を行った。面接官役は日本人TAが担い、教員・支援課職員は評価を行った。模擬面接では、日本語能力よりも好印象を与える振舞ができるか、またそれぞれが緊張感を持って役割を行えるかを重視して評価した。
- 3) 受験者は、クラスメート、教員・支援課職員・日本人TAからそれぞれフィードバックを受けた。

〈学生のコメント〉

- ・初めて面接の流れを知った。

- ・緊張して行うのがよかった。
- ・お辞儀の角度についてよくわかっていなかったが、今回実践して前より上手になった。
- ・動画を見て簡単そうだと思ったが、実際はそんなにやさしくなかった。
- ・自分では気づかない細かいことを注意してもらえて本当に良かったと思う。
- ・1回だけでなくもう1回直す機会がほしい。
- ・フィードバックの時間が足りない。
- ・時間があったら、開始と終了時だけでなく、実際の質疑応答も練習したい。

4. 3 特別授業についてのアンケート結果

2018秋学期の履修者に、学期全体を振り返ってもらうため学期終了時（2019年1月25日）にアンケート調査を実施した。質問項目は春口（2016）を参考にした。回答者数はその回の出席者31人である。

表6 アンケートの回答結果

問1 普段キャリア支援課に行っているか。			
よく行く	たまに行く	週1回ぐらい行く	全く行かない
2	6	12	11
問2 特別授業は役に立ったか。			
大変役に立った	役に立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった
9	21	0	1
問3 支援課職員の授業参加で、キャリア支援課との関係の変化はあったか。（複数回答可）			
支援課に行くようになった	行ってみようと思った	支援課が身近になった	特に変わらない
1	14	11	9
問4 支援課職員の授業参加の回数はどうか。			
もっと多い方がよい	今のまま2回でよい	もっと少ないほうがよい	0回でよい
7	23	1	0

問1では、3分の1の学生はキャリア支援課に「全く行かない」と答えているが、問3からは、授業を通し、キャリア支援課を身近に感じた学生が多いことがわかる。「特に変わらない」という回答者の中には、授業前から「朝活」などに通っている学生も含まれている。問2では、「大変役に立った」「役に立った」という回答が大半を占めるが、「全く役に立たなかった」と回答した学生が1名見られた。その回答者は、帰国希望者であり、グループ面接の練習で緊張感が強いられることをマイナス部分として挙げていた。問4の授業回数については、支援課職員・教員ともに3回は必要であるように実感していたが、今のままが適当だと思っている割合が最も高かった。以上の結果から、支援課職員による特別授業は、概ね好意的な評価を得ていると言える。

自由記述欄には、次のようなコメントがあった。

- ・実践練習の機会ができたので、私にとっては非常に大切な体験でした。
- ・大変役に立った。電話のマナーの授業を受けた後、すぐにバイト先で使え、楽になった。

- ・面接練習が大変助かった。やさしく教えてもらい、難しいことが理解しやすくなった。
- ・支援課の先生がたくさん教えてくれて面接の姿勢も実際にやって見せてくれたから大変勉強になった。日本人の先輩方も参加してたくさん意見をくれたことがありがたかった。
- ・外国人を雇用する会社や、外国人に対する考え方や要求をもっと知りたい。
- ・特別授業の内容が一部、通常授業の内容と重複していた。
- ・もっと完全な面接内容の流れを教えるのがもっと役に立つと思う。
- ・日本の就職に関する知識をもっと勉強したい。
- ・もっと実践練習をしたい。

学生のコメントから、特別授業の実践的な内容や細やかな指導が高く評価されていることが窺える。ただ、情報量や練習量をさらに望む声も多い。可能であればもう1回ほど特別授業の回数を増やすのが理想であるが、それが難しい場合は、授業以外で情報が得られる場、実践練習も行える場とつないでいく必要がある。例えば、適切な年次に教養科目である「キャリアプランニング」を履修すること、キャリア支援センターに通い、顔をつなげること、「ヤングハローワーク長崎」など地域の留学生就職支援機関を活用することなど、方法は複数ある。教員は支援課職員と協力し、これらに学生がアクセスできるよう積極的に促していくことも必要だろう。

5. キャリア支援課職員へのインタビューから

2018年度の試みを、授業者である支援課職員に振り返ってもらうために、インタビューを行った(2019年1月29日実施)。その回答には、蓄積された経験からの指導のノウハウや、留学生への指導から得た気づき、またさらなる改善や展開のアイデアなどが数多く挙げられている。以下、いくつかの項目に分けて、その語りを記述する。

(1) 特別授業を行うにあたって

- ・配置換え後は、まだ知識不足で説得力のある授業ができなかった。アンケートの共有が非常に役立った。
- ・前任者と同じではなく、自分なりに考えてみて焦点を絞り、「すぐに役立つもの」「体験・実践型」「チーム活動」を目指した。また面接も書く力も就職進学関係なく、社会人力として必要であるため、大学院志望の人にも共通で使えるものを意識した。

(2) 特に印象に残っていることや工夫したこと

- ・電話練習の際、今学期、日本人TAにサポートしてもらえたことで、実践的な雰囲気づくりができた。留学生同士だと日本語が不十分なまま行ったり、母語で話してしまい、どうしてもなれ合いになりがちである。一方で留学生は向上心があるので、厳しく指摘されるほうがよいようだ。日本語教員養成の学生はコメント力があり、効果を発揮した。普段自分自身は「すばらしい」という褒め言葉をよく言っていたが、特にレベルの高い留学生は厳しい指摘を望んでいるのだと気づかされた。
- ・前年度に行った「封筒の宛先を書く」という課題も、チーム戦にして取り組ませてよかったので、そのようなグループ内でのコミュニケーションをはかるトレーニング、チームビルディングの練習

も大切だと考える。

- ・留学生には会社の一員として働くイメージができていない人が多いが、漫画教材はシチュエーションがわかりやすく、導入に良いと考えた。ドラマを使用してもよいだろう。

(3) 就職活動やその指導において、日本人学生と留学生ではどんな違いがあるか。

- ・日本の就職活動は一括採用で、型や枠があり、スタート時期が決まっているが、留学生にはそこがなかなか理解できない。しかし、学生に個別に対応するにはマンパワーが足りない。そのため、入学時のオリエンテーションや授業を通じて流れを知ってもらうようにしている。
- ・書く力や面接対応については、日本語能力を除くと日本人学生との差はないと思われる。それよりも、日本の社会のしくみや基本的なマナー（電話・メール・服装・立居振舞・印象づくり）を知り、積極的に経験を積むことが重要課題である。特に編転入生にとっては就活の時間が短くなるので、今学期から秋編転入の留学生対象にガイダンスを行うようにした。
- ・日本人学生と留学生の共修を増やしたい。日本人学生は留学生に刺激を受け、お互いにメリットがあるはずだ。

(4) 特別授業を行うことにより、留学生のキャリア支援課の認知度・活用度は上がったと思うか。

- ・来室者は確実に増えた。アルバイト紹介につながったり、「漢字グランプリ」（漢字テストのイベント）や「朝活」（1限開始前にキャリア支援センターを自習室として開放し、手作りの朝食も提供）への留学生の参加が目立った。
- ・「朝活」には1年通っている学生もおり、熱心で感心している。協定校の先輩や友人から口コミで広がっているようだ。日本人学生がいるときは互いに挨拶させるようにし、コミュニティ作りの場になっている。

(5) 教員と協働で授業をすることについて

- ・授業と連動して行ったことにより、まず学生がどんな勉強をしているのかがわかった。留学生向けに内容の充実したテキストがあることも知った。そこで、座学や独学ではできない練習を提供し、アウトプットとフィードバックの機会をたくさん与えたいと考えた。
- ・教員がよく情報を求めて支援課に来てくれたので、学生向けの情報を積極的に周知できてありがたかった。掲示板だけでは留学生は情報を掴み取れていないと感じる。情報があまりすぎて留学生には難しいのかもしれない。

(6) 改善点・今後に向けて

- ・実践練習においては、できるだけフィードバックの時間が取りたかったが、足りなかった。理想を言えば、もっと対面で個人個人とじっくり話したい。
- ・卒業生や就活を終えた4年生など就活経験者の先輩の体験談をぜひ聞かせたい。留学生の縦のつながりを作ってあげたい。実際に「キャリアプランニングⅢ」では、「内定者講話」を行っている。
- ・留学生の中で就職を考えている人には必ず「キャリアプランニング」を履修してほしい。すべて日本語で講義を聴くことも必ず勉強になると思う。

春口（2016）では、教職員協働の授業運営がもたらすメリットとして「職員と留学生の結びつきの強化、職員の留学生教育、日本語教育への理解深化」（p.423）が挙げられている。今回の支援課職員へのインタビューの内容から、本年度の実践においてもこれらのメリットが十分もたらされたと考えられる。特筆すべきこととしては、今回協力を得た支援課職員が、本学「国際交流センター」での職歴が長く、留学生とのコミュニケーションの術を熟知していたことが挙げられる。いずれの授業も、興味を引くように導入の工夫がなされ、適切なスピードで、明瞭な発音で説明がなされるなど、留学生にとって非常にわかりやすいものであり、かつ彼らを集中させるものであった。支援課職員の指導法と学生の反応を間近に観察できたことは、教員にとって多くの気づきを得る機会となり、貴重であった。

6. 教員側のメリット

本節では、キャリア支援課と協働で日本語授業を行ったことによる教員側のメリットについて述べてみたい。まず、就職活動の一連の流れや、そこで必要となるエントリーシートや履歴書の書き方、面接の方法などについては、書籍の情報では理解していたつもりであったが、普段学生から個別に質問をされると、答えられないことが多々あった。よって、学期を通じて就職支援の専門家のパートナーがいてくれるというのは、非常に心強かった。実際、特別授業以外の回で出た質問や疑問についても、その都度相談に乗ってもらうことができた。

また、学生のニーズは幅が広いと、何を優先的に扱うかは常に悩ましい問題であったが、学期開始前後の打ち合わせにより、留学生だからこそ優先的に扱うべき課題や、具体的な指導方法などの提案を受けることができた。日本人学生への就活指導のために用意されたさまざまな教材やワークは、要点が絞られ、学生が楽しく取り組めるものが多く非常に参考になった。そして秋学期においては、日本語教員養成課程の日本人TAの協力が得られたが、これは支援課職員から出た提案であった。就職活動を終えた日本人学生であり、かつ日本語教育を学んだ学生という適任者に、ピンポイントで連絡が取れ、TAの依頼を快諾してもらえたのは、キャリア支援課と当該学生たちが、それまでに築いてきた信頼関係によるものにほかならない。就職活動を終えた4年生であるため、電話の相手役や面接官役をこなせるうえ、的確なフィードバックをすることができていた。それにより留学生側の緊張感・信頼感が高まり、結果、満足度も高まった。教員、支援課職員、日本人学生の3者でサポートできたことが、学生の満足度に大きく影響したと思われる。

さらに、教員が学内だけでなく地域とのつながりが持てたことも、支援課との協働から得たことである。例えば、支援課から学生向けに紹介されていた情報を活用し、ジョブフェアや合同企業説明会、講演会などに実際に足を運ぶことができた。それらを通じて、長崎県若者定着課や九州経済産業局の委託企業などと話をする機会も得られた。そうすることで留学生が直面する就職活動の一端を知ることができ、教員自身の留学生支援のモチベーションが一層高められた。

7. まとめと今後の課題

本稿では、学部留学生対象の「キャリア日本語」において、キャリア支援課と協働して行われている特別授業について、2018年度の実践を報告した。この協働授業には、春口（2016）に指摘されるように「教員と職員が互いの知識を相互補完しながら指導できる」「授業が留学生と職員との接点にな

り、留学生が支援課のサポートを受けやすくなる」というメリットがある。担当教員・職員の入れ替わりを経た後も、その授業形態の良さを継続し、また日本人TAの参加など、新たな試みを導入できていると言えるだろう。毎学期の実践記録を残し、メソッドを蓄積することにより、履修者のニーズに対応した指導ができるよう備えたいと考える。

今後の課題としては大きく二つある。まずは、特別授業の内容に関し、要望が多かったフィードバックの時間を増やすことや、就活を経験した先輩の講話の機会を設けること、継続的な日本人TAの確保について改善する必要がある。もう一つは、留学生のキャリア支援を授業内でどこまで、どのように扱うべきかの検討である。初回に実施したアンケートで、授業で聞きたいことに挙げられていた「進学か就職か」「自分に合った分野の見つけ方」などは、いわゆる自己分析やキャリア形成の指導内容となり、非常に重要なテーマである。これらについてどのような支援が可能か、まだ明確な方針が定まっていない。よって、引き続き留学生のニーズ調査を行いながら、キャリア支援課とともに考え、授業実践に取り組んでいきたい。

謝辞

特別授業の運営に精力的に取り組んでくださり、留学生をきめ細かく指導して下さった杉野博子氏（元キャリア支援課職員）と、本授業に快くご協力くださったキャリア支援課職員の方々に深く感謝申し上げます。また、キャリア支援課との関係を築き、協働授業をデザインして下さった春口淳一氏（元長崎外国語大学准教授、現大阪産業大学准教授）にも心よりお礼を申し上げます。

注

- 1 宮崎（2013）による用語で、「専門領域が異なる者同士が、協同実践する行為主体者（アクター）になる」とされる。なお、「市民リテラシー」とは、宮崎（2011）において、「市民が目標言語の外転的なインターアクション問題の解決に関わるだけでなく、共通の価値観を無い減価し、社会で役割参加するプロトコルを設定する上不可欠な公共的教養」と定義されている。
- 2 例えば2018年度の秋学期の「キャリア日本語Ⅱ」の履修生32名のうち、15名が帰国を希望していた。
- 3 『マンガで体験！にっぽんのカイシャ～ビジネス日本語を実践する～』（日本漢字能力検定協会、2017）

【参考文献】

- 独立行政法人日本学生支援機構（2019）『外国人留学生のための就活ガイド2020』（配布冊子）
- 春口淳一（2015）「長崎外国語大学の留学生施策とその越し方・行く末」『長崎学院 創立七十周年記念誌—新「長崎学」への出発—』長崎外国語大学, 139-150.
- 春口淳一（2016）「市民リテラシー型アーティキュレーションとしての「キャリア日本語」」『留学生エンrollment・マネジメントと日本語教育—小規模大学の取り組みを通じて—』早稲田大学大学院日本語教育研究科 博士学位論文（未公刊），第9章, 423-440.
- 宮崎里司（2011）「市民リテラシーと日本語能力」『早稲田日本語教育学』9, 93-98.
- 宮崎里司（2013）「グローバルレベルと市民レベルで協同実践する行為主体者（アクター）から捉える新たなアーティキュレーションの提唱」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第5号, 29-44.

